

實相抄云 日蓮もしや六萬恒沙の地涌の菩薩の眷屬にもやあるらん。南無妙法蓮華經と唱へて日本國の男女をみちびかんと思へばなり。(九六四)

最蓮房御返事云 我等末法濁世に生を大日本國にうけ忝も諸佛出世の本懷たる南無妙法蓮華經を口に唱へ心に信じ身に持ち手に翫ぶ事これ偏に過去の宿習なるか(八三七)

【完】

對支布教と我徒の用意

結 城 瑞 光

佛 法 西 漸

月は西より出て東を照し、日は東より出て西を照す。佛法も又以て是の如し。正像には西より東に向ひ、末法には東より西に往く。妙樂云く、豈中國に法を失ふて之を四維に求るに非ず乎等云云……(顯佛未來記)

戰禍に護る人さへ無い支那の古寺の裡で、携行の御妙判を拜讀する時、佛法西漸の豫識は正に今實現するの時期ではあるまいかと全身を絞る様な感激が涌いてくるのである。

支那の佛法は已に亡んで仕舞つたと云つてもよい程無力なものになつてゐる。傳道を使命とすべき僧侶は、民衆の

信憑を離れて獨善的な所行に満足し、寺塔は徒らに莊嚴の煙りに暗く僅かに一部の佛教居士に依つて佛法の社會性を見るのみである。此の落莫たる現時の支那佛教界を蘇生さす爲には眞に救濟力を有する大乘佛教と之が指導に任ずる聖者とを渴仰して止まぬ状態である。

斯の絶好の機會に於て大乘佛教の發展地たる日本の眞佛教を唐土に移して、支那國土の開顯と民衆の救濟を行ふことは日本佛教徒の佛勅應答の淨行であると思ふ。

今日の情勢から推して考へると、六百五十餘年前祖命を受けて遠く異境に外人布教せられた日持上人の壯行は、唯敬歎瞻仰の外は無い。然し爾來上人の先驅殉教に繼いで海外傳道に骨を埋めた者は何人あらうか、思へば慨嘆に堪へない次第である。

佛法西漸の時期に際會した本化の門下は日持上人の後囑を拜して死身弘法の覺悟を持つて對支布教に進出しなければならぬ筈である。

支那布教への關心

踞踏する日本の宗教界、肩々相摩する内地の佛教界、互ひに喘ぎながら島國根性で凝結した習慣は折角海外傳道に進出して常にも常に其對告衆は在外の日本人であつて、外人に對する積極的な布教活動は行はないのである。此の態度は佛教の本質からしても改めねばならぬ誤謬で今後は大いに對外人の布教を昌んにしなければならないのである。

從來海外布教と云へば兎角歐米を對象とする聯想が邪魔をして一番近接した外國の支那に對しては過去の戰爭史や民族の文化史的方面から輕視する一種の僻があることは事實で、斯うした自己優越感に浸つてゐる間に對支理解は懸

絶され、その間隙に乗じて第三國が經濟に教化に利權を伸張して來ることになるのである。

人口大約四億八千萬を有し天產物資の豊富な隣邦支那を布教の對象とせず今日に至つて排日抗日の清算の爲に莫大な犠牲を拂ふことは平素の關心が足りなかつたと云つても過言では無く、殊に容共抗日の精神的運動に依つて國を誤り東洋の平和を亂したことは日本宗教家として佛法西漸の豫識があるに對しても申譯の無い結果と云はねばならぬのである。

這時事變の勃發は天祐神助ともいふべき理由を各方面から首肯し得られる。即ち東洋に於ける我邦の存在意義を確立すると共に世界各國が日本の正義公道に三嘆し日本を頼むにあらざれば世界の平和を望むことは難いと自覺させる爲である。日本國家の興隆に力ある我佛教は國威顯揚と共に迷へる支那民衆を救ふべく斷乎たる決心を以て積極的に進出しなければならぬ。勿論對告衆は支那人で従前の様な日本人相手の教會建設であつてはならない。要するに従來の稀薄な對支觀念を根本からは正して「現在の支那を日本佛教の力で救済する」といふ大目的を樹立しなければ廣い意味に於ける日本佛教徒の國策參與は不可能なことになり終るのである。況や直接當面の責任ある本化門下は此際重大な覺悟を披瀝しなければならない。

支那に於ける外國宗教運動が如何に重大な影響を與へてゐるかに就て基督教の發展情勢を日本佛教徒の參考として通觀する必要がある。

在 支 基 督 教 情 勢

宣教師の傳道は夫れ自體としては神の限りない恩寵を惱める人々に施すといふ神聖な宗教の宣布に過ぎないのであ

るが、宣教師の進出する背後から常に宣教師の母國たる國家が利權獲得に乗り出てくる事を見逃すことは能きない。基督教が支那へ入つたのは舊教が西曆六四〇年唐の太宗頃でベルシヤの僧阿羅本が長安で舊教を弘めたのが最初である。新教は西曆一八〇七年英人ロバート・モリソンが南洋へ來て傳道を開始して支那へ渡つたものが最初である。兩教の不屈な傳道が今日の盛況を來すに至つたものであるが最も特筆すべきことは布教の自由を捷ち得たことである。それは新教が渡つて三十五年後の道光二十二年南京條約による布教の公認で、之あるために英米佛等の諸國が今日支那に於ける潤い地盤を得て歐米依存の聲を擧げさせる基本をなしたものである。兩教の在支發展情勢を一覽して見よう。

舊教は蒙古を加へて二十大教區百二十小教區に分つて外人宣教師二、六三六。支人宣教師一、八二二。外人修士五七四。支人修士六八九。外女人修士二、二二〇。支女人修士三、六二六。教會數約一萬五千。信徒數二、九三四、一七五。教育事業は大學二。中學高級一〇三、初級四五〇（高級は六年制、初級は四年制）生徒數二五、三九四。小學校三、八三三、生徒數一五五、二八〇。貧兒學校及托兒所一、八二七。兒童數二二二、七七五。職業學校七八九。生徒數不明。社會事業としては醫院二二六。患者九〇、四五二。施療所一、〇〇二。施療患者數九、八六四、五二七。癩病院九。收容患者一、二四〇。養老院二二六。收容數六、三三一。孤兒院四一五。收容兒童二七、八六八。給食嬰兒童七三、二二七。此外各種の社會事業を施設し相當の成績を擧げてゐる。

新教は何れ劣らぬ設備に全力を盡してゐる。

教育事業に於ては大學一〇、高等專門學校二一、學生合計六、六九六。中學二六九、生徒數四七、九四〇。小學校一、〇〇〇以上で生徒數約一五〇、〇〇〇以上外に盲啞學校九等がある。

社會事業では醫院二三二、患者三、九四二、六〇四。癩病院二二、收容患者一、七二二。孤兒院六〇。貧不具養老救濟機關一〇、收容者不詳。(以上上海前田牧師の厚意と中華全國教勢統計一九三七年版参照)

之等を國民政府の直接關係に屬する教育、社會各方面の事業と比較すれば教育に於て大學だけが十分の一であるが中學も小學も約半分であり、社會事業に至つては全つきり政府が基督教の足許にも及ばぬ有様である。

更に之に對して支那在來の各宗教團體の社會的施設を見る時唯餘りにも無力無活動であると云ふ他はないので、佛教の如きは僧侶七十萬も居ながら僅かに佛教學校の二三を經營し、社會事業は僧侶の手には殆どなく熱心な居士等によつて淨業社、世界佛教居士林等の微々たる存在を知るのみである。日本佛教に至つては御嘶にならない程度である。斯程までに發展した基督教が眞實支那に對し救済指導の本領を遂げ得るかといふ點を考へて見たいと思ふ。

事變と在支基督教の動向

在支基督教の傳道者に比例して信徒數が少いやうに思はれるが信徒の内容實質が知識階級であり、有産階級が多いのを知る時其の勢力は侮るべからざるものがある。元來支那民衆は八割近くまで農民で無學なものが多く、基督教信徒の指導者的立場に誘引されることは首肯し得られるところである。今次事變が誘發された原因が西洋崇拜、歐米依存にあることは全般の悉知するところで、國家の心臓ともいふべき國民政府の最高幹部は大多數歐米大學出身の連中であり、基督教信者である。蔣介石自身が宋美齡の誘引で基督教になつたなどは悲惨な滑稽であり、支那に取つては破滅の救世主信仰と云はねばならない。下之を習ふで若い學生生徒が設備の良い基督教系の學校を選んで新進振りを發揮して歐米讚美、日本排撃を指導するため一般庶民も之に附隨して躍るのだから遣り切れたものではないのであ

る。彼等のこうした蔭に得意然たる顔をしてゐるものは誰であらうか、それは教育、社會事業を看板にする宣教師達で強いては東洋平和攪亂の許すべからざる罪人であると云はねばならないことになるのである。

實に彼等が宗教宣布を理由として支那各地に細胞組織を作り歐米諸國の勢力を伸張する傀儡となり、常に國際スバの暗躍、政治的運動の黒幕になつてゐることは明である。蘇州の宣教師フキツチャーが事變の爲に紐育に歸へり、イヴニング・ポスト紙上に發表した記事などは其の一端であるが、全貌を知るに足るものである、曰く「十數年前から學生を煽動して抗日運動を激發させたことが今日の悲惨な戰敗を喫させたのだから支那に對しては洵に申譯けないことである」と率直に自白をしてゐるのを見ても彼等の行動が充分に解るのである。

宣教師等は六ヶ年に一度一ヶ年間歸省を許される。其間自己の經驗と意見とを巡廻講演で發表する、謬つた觀察と自國本位の宣傳を鵜呑みにする國民の誤解が産む日支觀は非常に危険なものであると云はねばならない。茲に於て支那に於ける基督教の對策には充分な警戒と指導とをしなければ獨り支那の滅亡を來すのみならず東洋平和攪亂の罪を受けねばならぬことになるのである。否既に其の反應は現實に醜態を暴露してゐるではないか。

日 本 宗 教 の 進 出

個人主義に慣れ迷信に生活を誤る支那の宗教、天帝の愛に國を賣る支那民衆、彼等を救済して東洋和平を招來する聖者は誰であらうか。實際支那民衆は永い間苛求に嘖まれて相互扶助の觀念に乏しくなつてゐるし、進んで強力なる國家を造らうとしても結局は軍閥の擄取に任せねばならぬ破目を自覺してゐるから個人主義に萎縮するのも當然である。従つて宗教的信念も利己的に趨るが若し安心した國家が出現すれば元來が大人的な民族だけに相當社會性が發揮

されると思ふ。安心した國家建造とは支那をして本然の支那の姿に復還させることで、單なる親日運動の強制に依つて實現するものでなく、支那人自身が中國の有する立場を明確に認識すれば必然的に現れる國家なのである。即ち新時代に適應した中國の建造は今次事變の産んだ天與の恩恵で實に聖戰といふ字句が適切に該當するのである。

此の聖戰の意義を宣揚するのが日本宗教家の分擔すべき一大義務であり一大榮光であると信ずるものである。

然らば日本宗教家は如何にして進出すべきかといふ方法論が問題になつてくる。滿州や北支に見る様な教會所設立を先驅とすると云ふに然らずで對内地人布教が目的でない限り直接支那民衆に教線を張らねばならない。それには布教者それ自體が支那化して行かねばならない。本當に支那を救ふといふ信念があるなら和魂中才で無ければ効果は擧がらない。而も最初から自宗の教義宣布を表面にしたのでは支那人が寄り付き難い。日本も知らない、宗教の社會性も御存知ない民衆に日本流の宣傳を眞向から行ふことは遠慮するより寧ろ害を及ぼすことにもなる。

此際は日本國を知らせることに通佛教的な立場であつて欲しい。勿論自己の宗教は其中に自ら光を放すことにはなるが茲暫らくは民衆宣撫の第一線に立つて日本の宗教家は斯くも民衆指導に實踐窺行するといふ強い慨念を持たせることが肝要である。同時に日本宗教家と民衆の握手に支那の宗教家が沈黙して居られぬやうに之又指導と援助をすれば日本宗教の支那進出が一層の迫力を持つて結實することになるのである。

我宗の對支進出

暴支膺懲の聖戰に對して國民精神總動員が決定した。我宗に於ては望月管長以下宗門縉素一統の強固な團結は所謂宗門の動員となつて内には銃後の護りを全ふし、外には從軍僧、皇軍慰問使の派遣となり、更に特筆すべきは前例の

ない宣撫教化使の選抜であつた。

北支に於ける開教所、日語學校等の開設に對して中支方面は僅かに南京寺一ヶ所のみ、然も私が従軍を命ぜられて既に一ヶ年、省みて慚愧に堪えぬ次第であるが、幸ひにして宗門當局の對支觀念と方針とが國策の遂行に協力して、眼前の形式に囚れず、軍の民衆宣撫工作の完成に後記の青年僧を其の一員に採用を願ひ、現在血塗になつて救濟指導に活動を續けさせてゐるのである。こうした經驗と熱心な者でなければ將來の對支布教が起きるものではない。徒らに法衣を纏ふて布施を待つが如き態度では到底宗門の大責任を果すことができない。

宗門派遣の宣撫員中には新聞の發行、學校の經營、難民の救濟又は寺廟の復活、民衆の指導等に或者は兼任或者は萬能の活躍然も何時突發するや計られぬ敗殘兵の襲撃防禦、討伐行動等全く内地では考へられぬやうな危険と複雑な役目である。この人々に宗門の將來を期待してゐるが又一面心身の疲勞、途上の變化等實に心配の種はあるが大部分が宗門發展の素地を造るものと深く信じてゐる。

近時南支に戦線が擴大して全支一杯に日本の國力と主張とを示すことになつて來た。此の秋、立正安國の祖意を承けて國土を護る我黨の士は奮つて支那に進出し、戦時は勿論戦後に來る支那指導者として不惜身命の布教に給仕すべきである。此稿を終るに當り現在中支に於て活躍の宗門人の芳名を録する。

○軍部特務部關係

河田行誠	外山寛郎	町田堯順	丹羽	豊	長瀬慧昭
小崎龍雄	百武一虎	五藤鳳山	中川義敬	宇佐美鍊昌	
山崎一夫	笠原一夫	佐野藏治	初山康夫	結城瑞光	

○從軍僧

小野瀨 大勝 阿蘇品 淨溫 森 明禎 木内 要英

○中支布教監督

末藤 辨孝 助員 後藤 良康

擱筆に當り「若先國土を安んじて現當を祈らんと欲せば速に情慮を廻し急で對治を加へよ」と祖訓を三唱して邪想中國の迷夢を覺醒せしめ、以て東洋の和平、四表の靜謐を祈らんとするものである。(一三、一〇、一三)

文學些言

齋藤要輪

下君、お便り拜見致しました。教學方面の私見を陳すべきには、締切が餘り切迫してゐます故、取りあへず隨想の二三を申上て失禮させて頂きます。

火野葦平の『麥と兵隊』はお讀みになりましたか。身延から出征されてゐる加藤鍊明師の書かれた陣歿英靈の木碑が達筆であることあたりから筆を起して、徐州の戦ひを目のあたりに叙述した近來の快著、改造社の宣傳を割引い